「転向」と「モダンガール」の終息（下）

――夢野久作『少女地獄』論――

申　河　慶

第一節　はじめに

本稿は、『日本語と日本文学』（第四四号）に所収された「「転向」と「モダンガール」の終息（上）――夢野久作『少女地獄』論」の続稿である。したがって本稿の論旨は前稿を受けたものとなって結論へとみちびかれる。そのため、本論に入る前に、前稿で考察した内容を簡略にまとめておきたい。

夢野久作『少女地獄』は「何でも無い」、「殺人リレー」、「火星の女」の三つの短編で構成され、そのテクストの構造は、作品のテクスト構造と、そこにサブテクストとして書き込まれる「共産党崩壊のプロセス」と「三原山投身自殺事件」という社会現象、そして読者がこのテクストとサブテクストを結びつける「謎」を解読することで到達する〈知〉の崩壊と再編、という三層の構造をなしている。しかもひとつの「謎」の終息が新たな「謎」を生み、ふたたび物語は始発するという点で円環をなしてもいる。前稿では主に「何でも無い」のテクスト構造を分析することで、共産党崩壊の顛末（サブテクスト）が「恐怖」の社会心理を生み出し、その「恐怖」がうわさや新聞メディアを介して流通し、増幅されていくプロセスを明らかにした。「何でも無い」において、その「恐怖」は姫草という「謎の女」を媒介することで、臼杵という男性医師の個人の「日常」生活に還元され、「家父長制」の論理（倫理）の破綻をきたしながらも、それが「天皇制ナショナリズム」に吸引・再編されることで強化されていく。テクストのプロット的にも姫草と臼杵は鏡像関係にあるのだが、その関係は「謎」「嘘」／強迫観念の鏡像関係として、共産党と体制側（特高）とがむすぶ暴力的な支配／被支配の関係

と並行する。それは「恐怖」の増幅によって「封じ込め」社会の病理性を形づくることの警告のメッセージ性を帯びる。夢野久作は姫草の遺書と臼杵の報告書という手紙の形式を対比させることで、そのような「封じ込め」社会の病理性を構造的に捉えたのである。したがって作者の警告は個人レベルで解決されるものではなく、個人を超えた「謎」の恐怖が読者を捉える。

「何でも無い」における手紙の形式は、「殺人リレー」と「火星の女」にも続いていくのだが、その際「恐怖」のリレーは、女性たちが新聞メディアや当局の公文書（検死報告書）などのもつイデオロギー的機能を逆手にとって利用していくことで、「抵抗」のリレーへとその質を転換させていく。「恐怖」から「抵抗」へという手紙の質の変化は、その語り手が男性から女性へと変わり、医師の報告書という公文書から、その公文書の虚偽性を告発（解体）する女性の手紙という私的文書への転換によって知られるようになる。本稿は、主に「火星の女」を分析することで、前稿の対象となった「何でも無い」というテクストにおいて提起された諸要素、すなわち男／女（支配／被支配）の鏡像関係、新聞メディアの報道と公文書の虚偽の暴露、うわさや恐怖の増幅がどのように「モダンガール」たちの「抵抗」の論理として転用（アイロニリユート）されていくのかを追究し、その「抵抗」の意味を時代の〈知〉のコンテクストと関連づけて考察する。その方向性は「天皇制ナショナリズム」へ抵抗していく「モダンガール」に対する作者・夢野の把握が、単に社会批判としての意味をもつのではなく、自己反省の意味をも合わせ持つことを明らかにしていきたい。

第二節　「恐怖」のリレーから「抵抗」のリレーへ

「何でも無い」と「火星の女」において、その間に通底する男女の鏡像関係が男女の転倒を反復することによって構成されていることは前稿で述べておいたが、「殺人リレー」という、もう一つのテクストはこの二つのテクストの間を架橋させ、複数の女性の声（手紙）が書き込まれることで、『少女地獄』全体の多声性や「恐怖」と「抵抗」の空間を拡大させる役割を果たしている。

「殺人リレー」における新高は「青バスに居るうちに幾人も幾人も女車掌を引っかけて内縁を結んで、その人に倦きると片端から殺して、どこかへ棄てて来るらしいんですって……。けれどもその遣り方が上手なので、まだ一度も疑われた

事の無い不思議な不思議な怖い怖い人なのです。こんな噂が立っているのは、あたし達、女車掌の仲間だけらしいのです」（三四六頁）という叙述から分かるように、事実に先立って（事実の有無にかかわらず）「噂」によって伝達／増幅される「恐怖」がまず設定される。その「恐怖」の手紙が、東京の青バスの松浦ミネ子から浜松の勉強バスの月川ツヤ子をへて、博多のミナトバスの友成トミ子にまで届き、それがまた女車掌を夢みる百姓の友だちに宛てられている。この連鎖・拡大を久作は「リレー」と呼ぶのだが、このリレーは東京で発生した「恐怖」が日本全国に広まっていく過程を捉えているものだともいえよう。

「殺人リレー」における新高と友成という男女関係は「恐怖」としての「家父長制」とそれに反抗する「モダンガール」の鏡像関係として捉えられる。ただ「殺人リレー」というテクストが『少女地獄』全体においてつなぎの役割を果たそうとしているため、やや図式的な概念のもとに述べられている感をぬぐえないが、恐怖の存在として一義的に造形されている新高は結婚を申し込んだ女性を殺してしまうという点で暴力的な「家父長制」を表し、友成はそれへの反抗にのみ生き甲斐を感じる「モダンガール」として造形される。つまり友成は「これこそホントに生命がけの恋よ。そうして、それと一所にドウかしてツヤ子さんの仇敵を取ってやりたくなったのよ。新高さんを取っちめて、ヒイヒイあやまらせた揚句に、自殺させるかドウカしたら、どんなにか愉快だろうと思ってしまう」（三五一頁）と決意している女性で、「家父長制」の支配関係におさまる「新高さんとの同棲生活のコースが、希望も何も無い灰色にズーッと続いているのが見えて」（三五二頁）しまうと感じる「モダンガール」なのである。

このような「家父長制」と「モダンガール」の鏡像関係をあからさまに示す「殺人リレー」のテクストにおいて注目されるのは、友成の「抵抗」の手段として使われるのが「嘘」という戦略だという点にある。友成の「嘘」は二つの場面で使われるが、その一つは、交通事故を装って月川ツヤ子を殺害した（とされる）新高を同じ手段（踏み切りでバスと列車を衝突させる）をもって殺す場面であり、もう一つは、警察の夫婦心中ではないのかという臨床訊問に対して、友成はあくまでも踏み切り事故であると答える場面である。友成はこの事故の新聞報道について次のように言及する。

新高さんの事がその時の新聞に大きく出ていたわ。「恐るべき色魔の殺人リレー」っていう標題でね。死んだ新高運転手は、東京の青バスを出てから後ズット尋ね者になっていた女殺しの嫌疑者だった事が死んだアトからわかったん

ですって。（中略）アレはみんなウソよ。新聞社と警察の作り事よ。妾に同情し過ぎているのよ。会社でも大層、妾の身の上に同情しているそうよ。おかしいわね。でも妾、平気よ。世の中ってソンナもんよ。（三六〇頁）

この引用でまず注目されるのは、この叙述がまえの「何でも無い」にみられる諸特徴が新高の正体不明性（新高を殺人者であると断定することは友成の証言が友だちの手紙というわさに基づいているためにできない）、新聞言説と当局の報告の虚偽性[3]、そして友成の「嘘」などに形を変えながら反復されるという点である。ただしそれは単なる反復ではない。「何でも無い」における「嘘」が「モダンガール」を「封じ込め」の状況に追い込ませる社会の病理性を示していたのに対し、「殺人リレー」における「嘘」なるものは抑圧的に作用する「家父長制」の支配体制と言論編成に抵抗する、「モダンガール」の能動的な戦略だったのである。それによって友成という「モダンガール」は天才的嘘つき姫草ユリ子もできなかった新聞記者と警察の眼を欺くことに成功したわけである。

第三節　女性のための五・一五事件

「殺人リレー」において断片的に追求された「家父長制」への抵抗の可能性は、次の「火星の女」においては「モダンガール」に対して抑圧的に作用する教育・科学言説の曝露、「抵抗の連帯」などへとさまざまなかたちに展開されていく。その焦点が「火星の女」に登場する「モダンガール」甘川歌枝なのだが、彼女は新聞記事の虚偽性とイデオロギー性を意識し、それを意識的に転用することで、新聞メディアを撹乱し、森栖校長に対する鮮やかな復讐劇を達成する女として登場する。

テクストの冒頭に配置される新聞記事と甘川の遺書との並置は、そのあとに続くプロットの展開においていかに甘川のメディア戦略が巧みであったのかをきわだたせてみせてくれる。それは「県立高女の怪事ミス黒焦事件噂は噂をよんで迷宮へ」、「森栖校長の失踪消失せた遺書と不可思議な女文字の手紙」、「県立高女メチャメチャ森栖校長発狂！虎間女教諭縊死！川村書記大金拐帯！黒焦事件の余波か？」、「意外！黒焦犯人は県視学の令嬢？」などのいくつかの新聞記事の見出しを取り上げるだけでもうかがえる。新聞言説は事件の意外な展開に右往左往し、その事件の犯人が殿宮アイ子であると推

測するだけで、真犯人である甘川歌枝には接近できないままとぎれてしまうのである。ただ殿宮アイ子の家出の際の書置きで校長と視学の堕落が暗示され、甘川の自殺が記されるだけでしめくくられてしまっている。したがって事件の〈真相〉は殿宮アイ子が保管している（であろう）甘川の遺書を読者だけが読めるというかたちで暴かれる。彼女の遺書によって明らかになるように、甘川は森栖校長の腐敗を告発するとともに、校長と視学の酒乱の現場をジャーナリストとして写真におさめる。このような女性による事件報道（手紙）によって男性社会の権力関係に裂け目を入れ（校長を発狂させ、視学を辞任させ）ることで、新聞メディアのジェンダー・ポリティックスをも乗り越えてしまう。

しかしこのような甘川の抵抗の意味は、なぜ甘川は校長に処女性を冒されただけで焼身自殺をしなければならなかったのかという「火星の女」の「謎」を読み解かなければ明らかにならない。いいかえれば、なぜ甘川は「校長先生のお手が、ちょっと私に触れましただけで、間もなく黒焦になって校長先生を呪咀わなければ」（三八一頁）ならなかったのか。もちろんその理由を単なる処女性の冒涜に対する復讐として考えることはできる。しかしそれでもまだなぜその復讐が「女性のための五・一五事件」というジェンダーと政治性の問題を含む行為として意味づけられているのかについて疑問は残る。

このような疑問に対する答えはすでに前節までの議論で部分的には明らかにすることができる。というのは、森栖校長の腐敗は「家父長制」の論理の破綻であり、甘川と森栖は鏡像関係にあるからである。甘川の復讐はそのような「家父長制」の論理の暴力性・欺まん性に対する抵抗として解釈される、ということだ。甘川は「先生がお名付けになった通りに火星の女」（三八一頁）になったのであり、森栖校長は「私は自分の子というものを一人も持ちませぬ。ですから、いつも皆様を私のホントウの子供と思っております」と述べることで二人は擬似父子関係をむすぶ。そのうえで二人は「私の破滅は校長先生の破滅……校長先生の破滅は私の破滅……私の破滅……校長先生の破滅……何もかも破滅……現在タッタ今破滅しかけているのだ。……そうして、どんな事があっても破滅させてはならないのだ。白状してはいけないのだ」（四〇七頁）という鏡像関係としても捉えられている。

このような森栖／甘川という男女／親娘関係において、「家父長制」の支配論理が「モダンガール」を極限までに追い込んだとき、甘川は抵抗をはじめざるをえなくなるのだ。森栖は甘川と関係を結んでしまった自分の過失を隠すために甘川を大阪の新聞社に就職させることで、自分から切り離そうとするが、甘川は男の森栖には要求されない「貞操」（過失

は森栖にあるにもかかわらず）が女の自分には要求されるため、その提案を拒否することができない。甘川の父親はなぜ甘川が大阪に行くことに躊躇するのかについてそれを彼女の「貞操」の問題（恋人の存在）として解釈する。つまり久作は家庭や社会の「家父長制」の支配論理において「貞操」はいかなる場合においても女性だけが責任を負わされる道徳だったことを示しているのである。ここで注意したいのは、久作が女性の処女性を判断する手段として「血液検査」という同時代の（擬似）科学言説を登場させていることである。

「……何という恐ろしい科学の力……。
私がもう清浄な身体で無いこと……自分でもそうは思われない位の儚ない一刹那の出来事……それがタッタ一滴の血液の検査でわかるとは……。
……何という残酷な科学の審判……」（四〇八頁）

この引用は、甘川が処女を犯されたショックで寝こんでしまい、医者の診察の際に血液検査を受けることになるのだが、その検査結果で甘川が処女でないということが判明したときの甘川の反応である。このように血液検査だけで処女性が判断できるというのは現在からは疑似科学言説としか言いようがないが、当時においてはそれが「科学的真実」として流通していた。当時の代表的な婦人雑誌『主婦之友』（一九三七年）に掲載された記事からみてみよう。

なぜ処女を要求されるかといえば、婦人は異性に接した場合、たとえ一度でも、その肉体に男性の影響を永く受けるもので、言い換えれば、今まで純粋だった血液がそのために混濁し、汚れることになるからであります。多くの潔癖な男性の到底堪えうるところではなく、また事故の子孫を伝える所以でもないのであります。男性の分泌物である精液には、異種蛋白という男性特有のものがあって、この異種蛋白は結婚してから夫婦生活をすることによって、女性の身体に侵入し、それと同時に女性の身体には今までと異なった血液が体内を循環するものですから、もし処女であるか否かを鑑定するときには、女の血液検査をしてみれば判然とするのです。ところが、この異種蛋白は精液だけでなく男性の唾液の中にもあるのですから、接吻によって女性の体内に入って行くことは当然なことで、接吻した女性

の血液を検査すると、いくら自分は処女だと頑張っても、処女でないところの証拠が歴然と現れますから、科学の力は恐ろしいものです。[14]

右記の二つの引用で反復される「恐ろしい科学の力」という「恐怖」表現を甘川の立場からみると、このような「科学（医学）」言説は「家父長制」の論理的矛盾・不貞を女性側になすりつけて、その「家父長制」を強権的に強化するもの以外のなにものでもないことになる。女性は家庭や学校という制度の面だけではなく、「科学」という〈知〉の規制によって完全に男性＝科学の監視下に置かれ、「家父長制」のなかに封じ込められてしまうのだ。

ここまでの考察をふまえてあらためて問い直してみよう。久作は一九三三年に設定された『少女地獄』においてなぜそこまで執拗に「家父長制」の問題を追究したのだろうか。それは一九三三年の時点において「家父長制」が再編・強化されたことにかかわろう。久作の眼はそこに向けられていたのであり、したがって久作からすると問題の焦点はそこにしぼられてこよう。

久作は「火星の女」においてその問題を教育言説の再編成が大きくかかわってくると提示している。そこで「火星の女」における卒業式場面での校長の演説は重要である。卒業式は君が代の合唱から始まるが、それは甘川にとって「その純真な、荘厳この上もない音律の波を耳に致しておりますうちから私は、もう身体中がゾクゾクして、いても立ってもおられないくらい空恐ろしい、今にも逃げ出したいような気持になってしまいました。……心のドン底から震え上らずにはおられない……「君が代の拷問」……」（四一三頁）として感じられる。テクストにおいて森栖校長の腐敗・欺瞞は語られても、それがなぜ「君が代の拷問」として甘川に感じられるのかについては直接的な説明はなされない。しかしその謎解きは校長の演説における女性の社会的役割の説明と、それがサブテクストとして含む同時代の下田歌子の教育言説を照応させることで明らかになる。

君が代の合唱につづく校長の演説は歴史観、社会観、そのなかの女性の役割を問い、「人類文化の歴史は、男性のための文化の歴史であり」、「現在の世界は、国際関係に於ても、個人関係に於ても」、「喰うか喰われるか」の弱肉強食の論理が支配する世界である。このような「戦場」としての社会では「不正不義な意味の社会悪が到るところに」（四一四―四一五頁）発生するが、その中に生きる女性はどうあるべきか。

家庭に於ける婦人の美しい本能……清らかな愛情は、この男性の世界と戦う唯一、無敵の武器であります。どんなに気の荒い、血も涙も無い男性でも、この婦人の底知れぬ忍従と、涯てしも無い愛情によって護られた家庭の中に在っては、心の底から安心して平和を楽しむ心になるのであります。そうして知らず知らずの中に大きな感化を、その心の奥底に植え付けられていくのであります。家庭内に争議を起す婦人は災なる哉。……どうか皆様は一日も早く健全な家庭を持たれて、潔白な、正直なお子さんを大勢育て上げられて、来るべき日本国を出来るだけ清らかに、朗らかに、正しく、強くされむ事を、私は衷心から希望して止まないのであります。（四一七頁）

この引用は甘川によって校長の言動の矛盾と虚偽が暴露され、「校長先生の悪徳を、眼も眩むほど美しく、上品に飾り立てた芝居」（四一三頁）として告発される校長の訓話の場面であるが、それは家庭から国家までが「家父長制」におけるジェンダー・ロールとして説明されることが確認できよう。そこで注目しなければならないのは、そのようなジェンダー・ロールに抵抗する女性が「家庭内に争議を起す婦人」という政治的なレトリックで語られていることで、「赤」の嫌疑がかけられることである。これは単なる憶測ではない。前稿において「火星の女」は「三原山投身自殺事件」を下敷きにしていることはすでに述べた。その書き換えの主要な点は、①実践女学校校長・下田歌子（女）→県立女学校校長・森栖礼造（男）、②同性愛者でない文学処女の厭世自殺→同性愛者で、かつ突出した身体能力を持つ少女（人見絹枝のスポーツ・ヒーローでありながら、フリークな、両義的な女性の身体性）の抵抗としての自殺、として整理できるが、この書き換えがここに関わってくる。

実践女学校は一八九九年「賢母良妻」を教育理念として、女性の実践的な学問を教育する女学校として下田歌子によって創立されたが、久作は記者の時代からこの女学校に注目していた。[5] このような背景をふまえるとき、テクストにおいて森栖校長の演説があったと記される一九三三年三月一三日とほぼ同じ時の一九三三年三月二一日付けの次のような下田歌子の訓話は興味ぶかい。

多分近い内に、わが日本帝国は国際連盟も脱退をするような場合になるだらうと考えます。それでいよいよ国際連盟

を脱退して日本が孤立をし、満州国の真の独立国として立派に立つのを見る迄には、どの位の苦心をしなければならないか知れない。どうも或は日本の危機をむしろ作ったんじゃないかと言ふ様な説も、そろそろ出て来ました。それを一つの問題として、所謂言ひまへとして、過激思想のやうな人は随分是迄起り立って来て、どの位力を損して居たか分りませんが、普通国民さえもそろそろ余りりきみ過ぎたなどと言ふ様な考へで、そっとぶつぶついふ声も仄かに聞えるやうですが、是は甚だ残念な事です。（中略）そこでこんどは女はどうしたらよからうかといふと、今始終言って居る銃後の婦人、銃後の婦人といふその一つ之をやる。（中略）人が公の為に尽して公事に斃れると言ふことは、始終は大変に幸福になるものだ。有りがたいと言ふ考を起させる。

日本は一九三三年三月二八日に満州国の承認をめぐって国際連盟から脱退する。下田の論理は国際連盟からの脱退という「非常時」日本においてはそれへの異議申立ては国民の力を分散させる「非国民」的行為である。女性は「銃後の婦人」というジェンダー・ロールに基づき、「国民」としての責任を果たさなければならない、というものである。「火星の女」における森栖校長の訓話と右の下田の教育言説を引き合わせてみると、森栖と下田の言説は家庭の内／外における女性の役割を問う点で差異をみせるだけで、論旨はほぼ一致していることがみてとれよう。「家庭内に争議を起す婦人」は「過激思想のやうな人」（共産党）であるため排除しなければならないわけである。このような認識が両者の論理をつらぬいているとすれば、森栖校長の訓話もまた天皇を家父長とする天皇制ナショナリズムに基づいていることはいうまでもないだろう。そのために甘川には「君が代」が拷問として感じられたわけである。

この〈知〉の枠組みは久作が注目する一九三三年に記憶されるといってよい。その年こそ、このような天皇制ナショナリズムによる国定教科書の改編というかたちで前面に押し出され始めたということを最後につけ加えなければならない。十五年ぶりに改編され、一九三三年度から使用されるようになった第四期国定教科書について、唐澤富太郎は「臣民の道を強化し、軍国における忠君愛国の精神の鼓吹を教育目的としたこの期の教科書は、従来の国家主義的な教育に一層深い哲学的基礎を与えて、強固な思想体系を構築しているのであって、「肇国の精神」が唱導され、神国観念が強調され」[7]たと述べている。

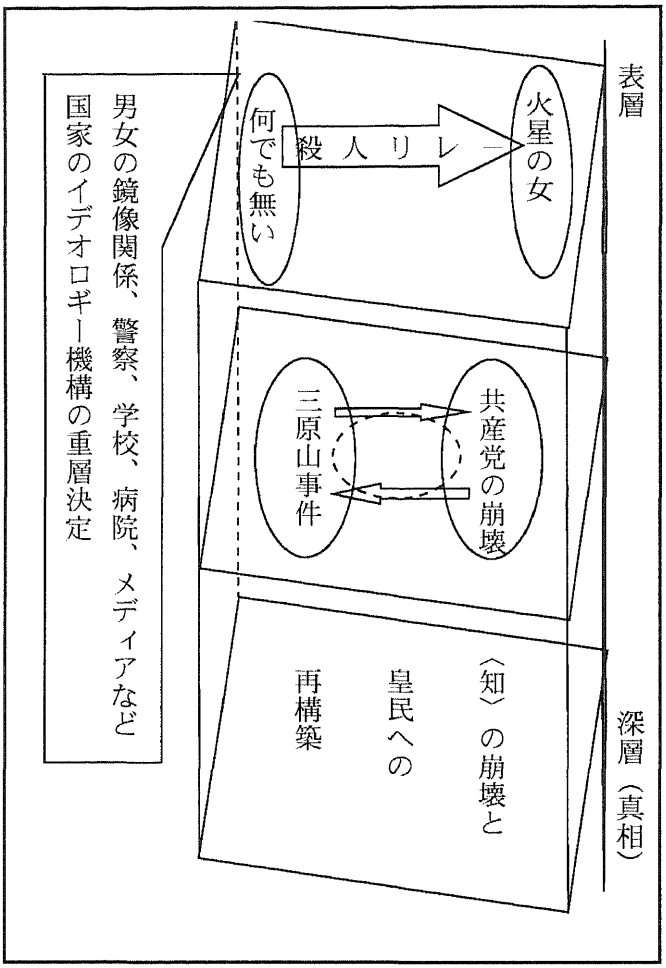
「火星の女」における森栖校長の演説が同時期の下田歌子の教育言説や国定教科書の改編の性格とダイレクトに結びつい

ていると捉えられるならば、久作の「社会機構」の分析の射程が社会事象の批評を超え、同時代の〈知〉のレベルまで達していることがわかる。甘川による森栖校長の、目に見える腐敗・堕落の告発は単なる「家父長制」の矛盾性を体現する一個人への批判にとどまるのではなく、むしろ「モダンガール」を家庭内に封じ込める〈知〉がそのまま天皇制ナショナリズムへと収斂していく、その〈知〉の枠組みへの痛烈な批判になってくるのだ。久作にとっては、下田歌子の訓話を森栖の演説に書き換えるということは、下田（女）の女性教育論が実は天皇制ナショナリズムに改編されていく「家父長制」の論理（男）を女性側が内面化した結果のものにすぎないことを示すための操作であり、甘川の人物造形が同性愛者で、かつ突出した身体能力をもつ少女とされているのは、その天皇制ナショナリズムの枠に収まりきれない、その枠をゆるがしかねない「両義的な女性性」がいかに社会から排除されてしまうのかを示すためだった。

『少女地獄』は実社会においては別個の言説として扱われていた「転向」と実践女学校生の「三原山投身自殺事件」を、一九三三年という時点の〈知〉のレベルにおいて深くつながった事件として描いた。久作がそれらの言説、すなわち共産党の崩壊のプロセスを扇情的に書き立てた言説と女性をめぐるさまざまな言説を結びつけて小説テクストに書き換えを試みたということは、ともに既存の「家父長制」論理の破綻を示しながらも、その一方で「天皇制ナショナリズム」として再編され、女性を家庭内に封じ込めてしまう結果をもたらした、という警告としようとしたのだった。そのようなイデオロギーの再編のプロセスには、警察の報告書、新聞記事、教育言説、科学（医学）言説などが重層的に介在した結果のことであった。

以上の議論を踏まえて『少女地獄』を再び図式化すると図のようになる。アルチュセールは国家の支配イデオロギーが被支配者側に再生産されるプロセスを論じ、それを警察、軍隊、病院、学校などの「国家のイデオロギー装置」による「重層決定」として説明する。[8] 久作が『少女地獄』において「無間地獄」という仏教語による円環構造のプロットを構築したのは、まさに「家父長制」が天皇制ナショナリズムに再編されていくプロセスに作用するさまざまな「国家のイデオロギー装置」の「重層決定」であり、「国民」におけるそのイデオロギーの内面化（「皇民」の形成）であった。

久作がこのように「家父長制」の再編が天皇制ナショナリズムに収斂されていく際のダイナミズムを描くことで示しているのは、その再編に（無意識的に、あるいは暗黙的に）加担している同時代人への〈知〉の内省の要求（「在るか無いかわからない超顕微鏡的な良心を絶大の恐怖」）であり、それに対するさまざまなレベルにおける「抵抗」の可能性の示



（図）『少女地獄』の三層の円還構造

られるように、「家父長制」に対抗する女性の自立を目指す。その過程において彼女たちは支配イデオロギーを鏡像的に模倣することで、その科学（医学）言説、教育言説の矛盾性・抑圧性を暴露する。さらに彼女たちに抑圧的に作用する警察の報告書、新聞記事を逆手に取り、手紙という私的メディアを利用することで新たな「抵抗」の連帯を模索する。さらに天皇制ナショナリズムの形成に賛同できない「モダンガール」たちは、「ほんとうの意味の親孝行」（四三一頁）をする唆だろう。

『少女地獄』における三人の女性、姫草、友成、甘川は、「彼女の念願は看護婦としての相当の地位と、教養とを作り上げた上で、女医としての資格を得て、自分の信ずる紳士と結婚して、大東京のマン中で開業する」（三〇八頁）とか、「女運転手になるわ。日本一の女運転手に」（三六〇頁）とか、「大阪の新聞社で女の運動記者」（四〇五頁）などの叙述にみ

ために「女性のための五・一五事件」（天皇制を覇道としてではなく王道として位置づけなおそうとするラディカルな政治運動）というテロのような直接行動を起こし、「熊本とか鹿児島とかから出た臨時列車で、満州に行く団隊の人を一パイに乗せていた」（三五八頁）列車にバスを体当たりさせて止めようとする。

そして何よりも重要なのは、『少女地獄』の三人の少女が「産む性」としての女性の身体性を自ら断ち切ったという点にある。姫草、友成、甘川の自殺はそれぞれ、「築地の婦人科病院、曼陀羅先生の病室で自殺いたします。子宮病で入院中にジフテリ症の心臓麻痺で死んだようにして処理していただく」（二五五頁）、「妾は、妾と一所に呪咀われたこの児も殺してしまいます」（三六三頁）、「二十歳前後の少女の屍体にして、特に腰部の燃焼十分なるよう燃料を配置した形跡あり」（三六五頁）と語られるが、女性が「産む性」としての身体を自ら断ち切るのは「家父長制」のうえに成り立つ「皇国」に対する窮極的な抵抗を意味しよう。このように天皇制ナショナリズムの形成に対するさまざまな抵抗の可能性の探求こそが『少女地獄』の最も注目すべき特徴ではなかったのだろうか。

第四節　夢野久作の「モダンガール」観

前節まで考察したように、夢野久作は「モダンガール」をめぐる〈知〉の破綻を『少女地獄』において喝破してみせたわけだが、しかしそのような洞察はそれ自体、久作の自己反省の結果として得られたということを見のがしてはならない。久作の『東京人の堕落時代』[19]は『少女地獄』の三少女の原型が見られる作品として注目されるが、『少女地獄』において自己解体的に捉え返される、かつての久作自身の「モダンガール」へのまなざしが見られる点で意義深い。

『東京人の堕落時代』は、夢野久作こと『九州日報』の特派員・杉山泰道による関東大震災後の東京のルポルタージュであり、それは一九二〇年代の日本において新たに形成される都市文化を盲目的な西洋追随の結果として発生したものにすぎないとみなす、西洋・都市文化に対する強い警戒心が表すテクストである。杉山記者のまなざしは「明治生まれの、九州育ちの、男」（三八二頁）のそれで、「明治維新後六十年に近く、〔中略〕吾が大和民族の文化の中心は、一朝の地震で「ゼロ」にまでにたたき潰されてしまった。あとには唯浅ましい本能だけが生き残って、大正十三年以降の大堕落時代を作った」（四〇八頁）という記述で示されるように、関東大震災後の都市文化を盲目的な西洋文明の追従として、プロ

レタリア文芸とモダニズムとをその西洋文明の浅薄な模倣に過ぎない「唯物文化」の所産だと批判し、「日本の生命は首都には無くて、地方に在る。すべての地方の純美さ、真面目さが、日本の命脈を精神的にも物質的にも支持している」（四一四頁）という言及からわかるように、都市文化としての東京の堕落が地方にまで及ぶのを塞ぎたいという意思を表わしている。

杉山記者の観察による東京の堕落は、「震災は大地からあらゆる女の塵をたたき出したらしい」（一九〇頁）という一節によって言い表されているように、女性の「堕落」として観察される。杉山記者はそれを上流社会／職業婦人（中流社会）／下流社会／不良少年少女の四つのカテゴリーとして分類し、彼女たちの髪型、化粧、服装、しぐさなどによって〈普通〉と〈不良〉を区別する。しかしその区別の基準は杉山記者の「この稿を作るためには、単に街頭観にのみ依らず、この方面に責任を持っている医師、教育家、司法官、興行者、その他多数の人々に御迷惑をかけて記事の正確を期した」（一六八頁）という言明とはうらはらに、非常にあいまいで、かつ先入観に基づいているものである。例えば、職業婦人には〈普通〉の職業婦人と「裏と表と二重の職業を持っている」（二〇八頁）醜業的な〈不良〉の職業婦人があって、後者は「白粉を塗り過ぎる。しかし襟垢は残り勝ちである。髪を大切にする。しかし毛の根は油でよごれている。美しい着物を着る。しかし裾にしまりがない。取り澄まして歩む。しかし眼づかいは下品である。そのほか唇のしまり、好みの調和なぞ、彼女のダラシなさを挙げたら数限りもない」（二一一頁）というような記述でみられるように、その基準は記者の主観によるものであり、しかもその判断基準は既成の男性社会の強い先入観を露骨に表しているものである。

しかしこのまなざしは作家・夢野久作によるものではなく、新聞記者・杉山泰道によるものだということに留意しなければならない。つまり『東京人の堕落時代』は新聞記事の生産システムの強い制約の下で書かれていたものであり、後日作家・夢野久作によって次のように反省される。

> 九州日報社で編集と外交の中ブラリンをつとめております時分に、新聞専門家の間で名編集長として聞こえていた、同時に自由詩社の元老として有名な加藤介春氏から、神経が千切れる程いじめ上げられた御蔭で、仕事に対する好き嫌いを全然云わない修業をさせられました。死ぬほどイヤなお提灯記事、御機嫌取り記事、尻拭い原稿なぞいうものを、電話や靴の音がガンガンガタガタと入り乱れるバラックの二階で、一気に、伸び伸びと書き飛ばし得る神経にな

り切っていたのです。自分の筆を冒涜し、蹂躙する事に、一種の変態的な興味と誇りさえ感じていたものでした。[10]

このような記者・杉山泰道に対する作家・夢野久作の反省がもっとも顕著にみられるところが「モダンガール」についての認識の変化である。

『東京人の堕落時代』において杉山記者は「モダンガール」を〈不良〉少女の範疇に入れ、「自分の心にかかるすべての重み—物質の威力、道徳の権威、良心の束縛を下界はるかにふり棄てて、空中に吹き散る紙のように、気楽に、面白くひるがえって行きたいのがモダンガールである」（三八〇頁）とその軽薄さを記した上で、軽薄に「解放を望む少女は、特に刹那刹那の気分に動かれ易い」（三七九頁）ため堕落に陥る傾向があると断定する。そしてその実例として杉山記者はアルファベットの頭文字を暗号として使うことで不良少年との密会を斡旋する、ある名門女学校（実践女学校）の秘密社交クラブ「不良少女享楽団」の存在を田宮（仮名）教師の夫人から聞き出し、その話に基づいてその「享楽団」の団長を「どちらかと云えば八方美人にも見えるし、一種の変態性欲主義者ではないかと思われる。又は、そうした悪魔的の仕事その物の興味に満足しているに過ぎぬのではないかと思われる節もある」と疑心をめぐらす。杉山記者はそこにとどまらず、それだけの情報をもって「いろいろと考えた挙句、警視庁に出かけて彼女の事を」告発し、刑事からは「そんな真面目な学校に、そんな生徒が居られるだろうか」（四〇五頁）と退けられてしまう。

この杉山記者の一連の言動が『少女地獄』にそのまま導入され、作者・夢野久作によって自己言及的に反省されていることはいうまでもないことだろう。暗号を用いることで不良少年との密会を楽しむ「団長」像が「何でも無い」ことで嘘をつく姫草像に、そして噂をあたかも事実であるかのように言いふらす田宮夫人が姫草の身元引受人の人物像にそれぞれ投影される。そして何よりも注目されるのは、強迫観念にも似た疑いで希薄な根拠をもって警察に告発してしまう杉山記者の人物像が臼杵医師と宇東記者像として反復される点である。このように久作がほぼ十年の期間をおいて書き換えをおこなったことが意味するのは、杉山記者が各方面の権威に寄りかかって下した「モダンガール」への批判は、実は久作自身もかかわったその各方面（新聞、病院、教育）の〈知〉の崩壊——「モダンガール」を再び家庭内に封じ込めてしまったのは結局男性社会の支配論理の虚偽性、矛盾性を露呈すること——にすぎなかったという久作の内省であろう。

第四節　むすびに

本稿はこれまで『少女地獄』の作品構造を分析し、そしてそれを一九三三年という年の政治的、社会的コンテクストと照応させるという方法をとってきた。その結論として、夢野久作が「家父長制」の改編のうえに造りあげられる「天皇制ナショナリズム」の形成をするどく探り当てたことを明らかにしてきた。久作はそのプロセスを「モダンガール」を中心にして捉えなおすことで、「天皇制ナショナリズム」の排他性を暴露する。それは「国民国家」を否定するコミンテルンの指示にしたがう共産党と「銃後の婦人」というジェンダー・ロールに収めきれない「モダンガール」をともに「非国民」として排除する論理であることを告発することになるのだが、そのことは同時にさまざまな「抵抗」の可能性を示すことでもあった。

しかし現在を生きる我々は久作のこのような同時代認識さえも「歴史的限界」を乗りこえられなかったとたやすく指摘することができる。久作の批判意識はそもそも、明治維新以後の日本の文化は西洋文化の無批判な受容の産物にすぎないという認識に基づくもので、一貫して盲目的な科学主義・唯物主義（社会主義、およびモダニズム）による思想の堕落を批判してやまなかった。のみならず久作はそのような思想のうえに成り立つ社会への抵抗を「五・一五事件」と呼ぶことにも躊躇しなかった。久作が示唆したような歴史認識は「日本精神」の発掘というかたちで展開され、それが『近代の超克』[11]として国家の支配イデオロギーに再び絡めとられていった。「五・一五事件」はその後の「二・二六事件」とともにその動きを加速させた政治的事件だったことはいうまでもないことだろう。

それにもかかわらず、久作のテクストはこのような大文字の政治や思想史、かつ事後的な「歴史の断罪」をはるかに乗りこえるものである。久作の『少女地獄』は今日までつづく「国民国家とジェンダー」の議論の枠を予兆するとともに、乗り越えることのできる視座を与えてくれる点で再評価を要請されるべきものといえよう。

そのためにも、本稿のまとめに当って、『少女地獄』が現在に語りかける論点を示すために、「国民国家とジェンダー」の議論を簡略に整理しておきたい。周知のように、ベネディクト・アンダーソンは「国民国家」の自明性を問いなおし、それを「想像の共同体」という構築概念として提示して以来、「国民」の造られ方が問題視された。これを受け、女性史の研究分野でも「女性の国民化」が議論され始めた。そのような「女性の国民化」の研究課題は女性の自発的な戦争協力

を問い直すことによって、女性史における「被害者史観」から「加害者史観」へという大きなパラダイムの変換をもたらした。それによって平塚らいてう、市川房枝、高群逸枝などの日本のフェミニズムの創始者たちの翼賛思想が徹底的に追及され[12]、庶民女性の「加害責任[13]」も問われるようになった。上野千鶴子の『ナショナリズムとジェンダー[14]』によれば、戦時期の女性運動が総力戦体制を「従来のもろもろの婦人問題、女性の労働参加と母性保護、女性の公的活動と法的・政治的地位の向上などの懸案事項をいっきょに解決する「革新」と」（六六頁）みなしたため積極的に戦争に加担してしまったと「女性の国民化」のプロセスを究明することで、女性の「戦争責任」を問う。しかし上野が指摘するように、「女性の国民化」が推し進められるさなかに「それを批判する超越的・歴史外在的な視点を持つことは誰にとっても困難な課題」（八七頁）だったことは否定できない。このような研究成果をふまえたうえで、上野はより根本的な問題を提起する。つまりジェンダー・ロールに基づく女性の戦争参加は、それがアメリカのようにジェンダーの役割分担をなくすことで女性を直接動員する〈参加型〉であれ、日本の「銃後の女」のようにその役割分担を維持する〈分離型〉であれ、男性を中心に女性を「二次国民」とするジェンダーの区分のうえに成り立つ以上、女性の解放を根本的に不可能にする。したがって女性が見せかけの「国民国家のジェンダー中立性」という罠に陥ることなく、「国家」を乗り越えるためには「ジェンダー」の概念それ自体の神話を解体させなければならない、と主張する。

夢野久作の『少女地獄』は「モダンガール」と「家父長制」の葛藤を通して「天皇制ナショナリズム」に収斂される女性のありようを見つめた。そのまなざしが焦点化した問題からは、当時の女性運動家がその「女性の国民化」を女性解放とみなしたのとは異なる「天皇制ナショナリズム」の排他性を指摘することができた。久作のこのような同時代認識の重要性は、当時のどのような知識人も容易に到達することができなかった認識だったという点でいくら強調してもしすぎることはないだろう。久作は「天皇制ナショナリズム」の形成という時代の変動を国家のイデオロギー装置の「重層決定」として提示して見せることで、そのプロセスに（無意識的に）加担してしまっている人々（我々）の主体的批判精神の欠如を問い、それによって女性史における女性の戦争責任を事後的、超越的に「断罪」する「加害者史観」をも乗り越える。

このような久作の批判から今日的課題をあらためて問うならば、〈銃後の女〉というジェンダーロールに基づく「女性の国民化」の論理とは、「家父長制」のうえに成り立つ「天皇制ナショナリズム」という男性の支配論理を女性に押し付けることでいやおうなく内面化させた背理的な論理に過ぎない。とすれば、それは逆に言えば「国家のジェンダー性」を

如実に示す論理だったということになろう。本論文の立場からすれば、久作は姫草や甘川という「モダンガール」の身体的過剰性が〈銃後の女〉というジェンダーロールにいかに収まらないかを示すことに意図的だったとみる。そのような操作をおこなうことで、逆に女性が「国家」を乗り越えるために問われるジェンダー概念自体に我々の目を向けさせてくれてもいる。ここまで示してきたように夢野久作の『少女地獄』は大きく時代を乗り越え、いまだに解決されない多くの問題に我々を導いてくれるということになろう。

【注】

(1) 拙稿「「転向」と「モダンガール」の終息（上）――夢野久作『少女地獄』論」『日本語と日本文学』第四四号、筑波大学国語国文学会、二〇〇七年三月発行予定

(2) 夢野久作『少女地獄』黒白書房、一九三六年〔所収：『夢野久作全集8』筑摩書房、一九九二年〕。以下『少女地獄』からの引用は特別に記さないかぎり、本文中に全集の頁数だけを記す。

(3) 「殺人リレー」のコンテクストとして「空を飛ぶパラソル」『夢野久作全集4』（筑摩書房、一九九二年）を考察することは興味ぶかい。「空を飛ぶパラソル」は、博多を通る鹿児島線の踏み切りでとある美人看護婦が自殺するが（①「殺人リレー」と同じ舞台設定）、その現場を目撃した新聞記者は特種ほしさに彼女を見殺しにする。その記者は看護婦と大学医師の不倫問題（②「何でも無い」の題材）を暴いて、推測を交えて報道する（③新聞報道の虚偽性、煽情性）が、事件関係者（大学医師と看護婦の親）は自殺した看護婦と自分たちが知っている人とは別人であると主張する（④正体不明性）。誰の話が正しく、誰が嘘（⑤）をついているのかも明らかにされないまま物語は新聞記者の目を追って別の事件に移される。番号として示したように、「空を飛ぶパラソル」は「何でも無い」と「殺人リレー」をつなげて読むうえで興味深いコンテクストを提供してくれる。

(4) 澤田一「人間の血の話」『主婦之友』一九三七年二月号、三八四頁

(5) 久作は、「東京人の堕落時代」（『夢野久作全集2』、筑摩書房、一九九二年）において「××女学校の名は日本中に響いている。畏きあたりの御おぼえ目出度い某名流夫人が創立して以来数十年、今年の某月某日、やんごとなき方々の台臨を仰いだ程の学校である。七百余人のお嬢さんに一定の制服を着せて、頭髪の結び方まで八釜しく云っている。設備の完備している事は東都の私立女学校でも有数である」（四〇二頁）と実践女学校について言及している。

(6) 『実践女子学園八十年史』実践女子学園、一九八一年、二七四―二七六頁

(7) 唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社、一九五六年、四三三頁

(8) ルイ・アルチュセール『イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』西原長夫訳、平凡社、二〇〇五年

(9) 夢野久作「東京人の堕落時代」『九州日報』一九二五年一月二十二日～同年五月五日〔所収：『夢野久作全集2』筑摩書房、一九九二年〕。
以下『東京人の堕落時代』からの引用は、本文中に頁数だけを記す。
(10) 夢野久作「スランプ」『ぷろふいる』一九三五年三月〔所収：『夢野久作全集11』筑摩書房、一九九二年、五四―五五頁〕
(11) 河上徹太郎、竹内好〔ほか〕『近代の超克』冨山房百科文庫、一九七九年
(12) 鈴木裕子『女性史を拓く1――母と女』、『女性史を拓く2――翼賛と抵抗』未来社、一九八九年
(13) 加納実紀代『女たちの〈銃後〉』筑摩書房、一九九五年
(14) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、一九九八年